

い釣れ釣れなるままに

2002年思い出の釣行記 PART. 6

盛者必衰の理

鹿島釣狂

釣遊会第7回大会

☆開催日 平成14年11月17日

☆開催場所 賀張川～三石

☆入釣場所 新冠川右岸→判官館前

☆潮 満潮 01:49 116cm

満潮 07:24 70cm

☆釣果 カジカ 351 mm 14

アカハラ 355 mm 1

重量 396 0g

☆成績 合計点数 1102 点

成績 5 位

持ち点 4 点

累計点 24 点 (①⑤⑧⑥④)

防寒対策

芦別は2・3日前から大雪であったが、岩見沢に着いて見ると雪がない。しかし、気温の方は真冬並の寒気団が押し寄せ路面が凍っている。天気予報では日高方面の明日の朝方の気温が-5度であると告げている。この時期の釣り対策はまず防寒からである。背中に張る物、防寒着のポケットに入れる物、ウェイダーのつま先に入れる物、エサがシバレないように保護する為にとカイロを用意する。着込むのは毛糸のセーターに毛糸のモモヒキ、毛糸の靴下、毛糸の手袋と毛糸ずくめである。モモヒキは太い毛糸で編み込んであり、胸までをすっぽりと包む代物である。ダルマの様になり、アタリに合わせての俊敏な動きはできないが凍えてしまつてはよい釣りができない。

集合時間が近付いてくると岩見沢地方も雪になって来た。降りしきる雪の中、仲間が続々と重いリュックを担いで集合してくる。本大会に交縁会の岩本満氏が道新スポーツの取材で同行していただくことになった。彼は北村出身で、釣遊会仲間の吉井氏とは小学校での同級生であるということだ。お酒やおでんなどを差し入れして下さり、バスの中は気心の知れた悪童たちの宴会場となった。

釣り場現況も快く紹介して下さい。本日は大狩部や節婦、新冠では大会が開催されておらず、魚は絶対いるはずだと氏は言う。また、先週、山岸氏が下見して来ており、新冠で下りると言う。以前、この時期に新冠川河口で大釣りをして優勝した記憶が蘇り、新冠川大橋の手前で山岸氏と共にバスから降ろしてもらおう。

お地藏様に原貞掛け

キャスターに荷物を積み込んで青少年センター前を通り海岸に向かう。途中、赤い前掛けをした大きなお地藏さんに出くわす。阿部会長が腰を抜かすほど驚いたというだけあってかなりの大きさである。最近売り出し中で格闘家かタレントか分からなくなってきたボブ・サップよりははるかに大きい。私には今日の豊かな釣りを約束してくれるお守りのような気がして、「大物に恵まれますように」と心の中で呟き、合掌して祈願する。

河口で山岸氏と共に並んで竿を出す。早速、アカハラ仕掛けとカジカ仕掛けをドボンと打ち込む。どちらの仕掛けも大して変わらないが、アカハラの方は気休めに針の号数だけを小さくした物だ。1本はカンカイ用にと磯目をつけて遠投しておく。ここで優勝した時は45cmを越える嫁のカンカイがものをいったからだ。

直ぐに35cm程のカジカが来た。お地藏さんに手を合わせたご利益があったと考える。しかし、その後は、カジカが食いつく暇が無いほどに次から次へと型物のドンコがやって来た。ふと見ると、山岸氏がいらない。ドンコに業を煮やして移動して行ったものらしい。

ドンコの襲撃に負けずに丹念に打ち返していると、同じような型のカジカがポツンポツンと出て4匹そろった。後は嫁であるがなかなか出ない。その中でカジカのガガッというアタリともドンコのチョコマカというアタリとも違うアカハラのそれと分かるアタリが出た。慎重に合わせた後、波打ち際に寄せる。竿を寝かせてさらに慎重に取り込みを図った

が、白い魚体がドタンと暴れた弾みで外れてしまった。あわてて波打ち際に駆け寄り次の波が来る前に我が手中にする。35cm程のアカハラだがこれもお地蔵さんに祈願したご利益があったのだろう。

ドンコを釣り尽くしたのか、カジカが続けて来るようになった。しかし、どれも35cmを越えるものではなく似たようなものばかりである。

心頭滅却すれば

寒さが増して来た。空は満天の星空でしかも満月である。竿先のギョギョライトにも負けないオリオンが瞬いている。手の凍えと共にエサがシバレ始めた。シバレ対策にビニル袋に包んだ懐炉をエサバケツに入れているのだが、役に立っていない。私の体は毛糸に覆われているのと、背中に張ったカイロのせいもありさほど寒さを感じない。しかし、エサがシバレとなると、話は別である。海岸に打ち上げられた木切れを集める。その木切れの表面にも氷がこびり着いており、なかなか燃え上がらない。イタドリの茎だけは勢いよく燃えあがるのだが長持ちせず、すぐにポシャンとなる。それを繰り返しているうちに、大きな木切れにも火がつき始めて辺りを赤く染めた。遠目に置いたカツオやイカゴロが溶け出す。

『碧巖録講話』の一節「心頭滅却すれば火もまた涼し」を決め込んで凍えた手を炎の中に入れてみる。手の感覚が戻り始めたころあわてて手を引っ込めるが多分火傷を負っているのだろう。

カジカを数えて見ると12本になった。どれも30～35cmばかりでいくら釣っても大きさが変わらないので移動することに決めた。判官館方向なのだが、そのためにはトンネルをくぐり抜けなければならない。出発前に日高線の列車時刻を調べておいたが、そのメモを忘れてしまった。このトンネルを列車が通過するのは確か6時過ぎだと記憶しているが、自信が持てなく、臨時列車のこともあり躊躇していた。6時が近づいて来たので荷物を片付け、移動の準備をする。荷物を担ぎ、トンネルの入り口まで行くと、その脇に列車の通過時刻が書いた立て札が立ててあった。もう間もなくである。

ゆるやかに時が流れる

ピーッという長い汽笛を鳴らして列車が近づいて来た。トンネルが近いので危険を知らせるための合図なのだろう。一両編成のディーゼル機関車である。ゴトゴトとレールを響かせて目の前を通過しようとしている。運転手と目が合った。思わず手を振ってしまった。運転手も白い手袋をはめた手を振ってくれた。何だかほほ笑んでいるようでもある。さらに大きく手を振る。列車の中央ほどに陣取った高校生らしき男の子が窓を開けて手を振ってくれる。釣り好きな子と見た。

手を振る者に対して手を振り返す。これはごく自然な風景に違いない。私の子どもどもの昭和30年代は当たり前のことだと思って、通過する機関車に手を振っていた。する

と、必ず列車の中の誰かがそれに合わせて手を振ってくれたものである。もちろんその手を振ってくれるのは見知らぬ人であった。

ぼうぼうと黒い煙をあげながら走る機関車は私の憧れであった。時々、車輪の間から吹き出す蒸気を見て、羨望の眼差しでボーッと立ち竦んでいたものである。

「♪ 運転手は君だ、車掌は僕だ。後の 5 人は電車のお客」の唄に合わせて走り回る遊びでも、誰もがお客や車掌ではなく運転手になりたいと口論したものだ。飛行機やヘリコプターが低空で飛んでいるのを発見した時などは、有らん限りの声を出して叫び、手を振りながら少しでも近づこうと走ったものである。操縦士がこちらを見てくれないかなと思ったり、あわよくば下りて来て自分を乗せてくれるのではないかとも思ったものである。

蒸気機関車が特急電車に、プロペラ機がジャンボジェット機に取って代わり、スピードも増して時代が変鋭した。列車の中での酔っ払いの傍若無人ぶりにも無関心さを装う殺伐とした昨今である。

ディーゼル機関車の中から手を振ってくれた運転手と男子高校生はとっても温かい家庭生活を送っているのだろうなと思いつつながら列車を見送った。そして、時が停まったようにゆるやかにトンネルに滑り込んで行く機関車に向かって、しばらく手を振り続けていた。

取って置き of 秘密兵器

トンネルを抜けたところでは山岸氏が高い防潮堤の上から竿を出していた。山岸氏は小物ばかりで余りよくないということである。荷物を一旦そこに置いて、さらに先へ進むと、崩れた防潮堤の下の砂浜で高橋氏が竿を出していた。彼もたき火に当たっているところを見ると、あまり芳しい釣りをしていないのだろう。更に奥の湾洞では安曾氏が盛んに竿を振っているのだが、やはり苦戦しているようだ。湾洞と岩盤の境にも私たちより先に来ている釣り人が 2 人いたが結果はよくなかったらしい。地元の人が仕掛けた延縄にも魚はついていなかったようである。膨らんでいた期待が萎む。

陽がさして来た。私としては苦手としている防潮堤の上での釣りとなる。大物がかった時はどうすればいいのだろう。山岸氏に尋ねると、リュックの中から小道具を出させてくれた。それは、牽引ロープの先に 50 号程の鉛をつけ、その鉛の端に錨針を埋め込んだ代物である。大物を防潮堤まで寄せた後、その錨を下ろし、魚を引っかけて上げるらしい。彼もその素晴らしい時の為に用意はしているが、いまだその機会に恵まれられないということである。

本誌の中村正方氏『釣りキチ随想録』の様似釣りデッキでの格闘場面が思い起こされる。私にはあれ程のごつい仕掛けはチト手が出せないのもので、この錨を作成し、リュックの隅に忍ばせることになるのであろう。是非ともそれを使う機会に恵まれたいものだ。

この防潮堤の上から少しずつ移動しながら遠投を繰り返す、河口と同じようなカジカを 3 本加えた。山岸氏に助けを求めて錨針の世話になるような大物は、ついぞ姿を現さないまま締め切り時刻が来てしまった。山岸氏は帰り際にアブラコの 40 cm 級を抜き上げたよ

うだが、もちろんその秘密兵器を活用することはなかったであろう。

イエローカード

9時過ぎに下り列車がやってきた。私の目の前で速度を緩め、車両を軋ませながら通り過ぎ、トンネルに吸い込まれていく。トンネルの先はゆっくりとカーブしており、前の車両から順次折れて見えなくなっていく。レールの継ぎ目を乗り越える鉄輪の音が、一つひとつ後方に跳び退（すき）り聞こえなくなった。

私も重い荷物をキャスターに積んでゴトゴトとトンネルの中を歩いた。欲張って釣り上げたカジカを全部もってしまったので、来た時より重たく感じられるほどであった。途中の砂利の坂道で荷物を背中に背負った時にはその重みで足を滑らせて亀のようにひっくりかえる醜態であった。来た時はこれからの釣りに対する期待もあり、さほど感じなかった下りのスロープも帰りはなかなかの上り勾配に感じる。

新冠川沿いのパークゴルフ場に向かってひっきりなしに車が通りかかる。これからパークゴルフ大会が始まるのだろう。日高は空知に比べて温暖で気候もよい。空知では閉鎖してしまったパークゴルフ場もここでは遅くまで楽しめるのだ。釣りもまたしかりである。

駐車帯の脇によろやくたどり着き山岸氏と共にバスを待つ。草藁の上で寝そべり、こわばった腰を思いっきり伸ばす。バスに乗り込むと、島氏と阿部会長が不穏な動きをしていた。

審査の結果は、

審査結果

優勝	島 強二	1 3 2 6 点 (カジカ 480mm+ハゴトコ278mm+5680g)	越 海
準優勝	岩本 満	1 3 2 1 点 (アブラコ475mm+カジカ 411mm+4350g)	盈 進
3 位	嵐 光博	1 2 8 4 点 (アブラコ492mm+カジカ 343mm+4490g)	盈 進
4 位	吉井 博	1 1 4 1 点 (アブラコ410mm+カジカ 364mm+3670g)	盈 進
5 位	鹿島釣狂	1 1 0 2 点 (カジカ 351mm+アカハラ355mm+3960g)	新 冠
身長優勝	阿部重義	5 1 . 8 cm (アブラコ)	三 石

身長優勝の阿部会長は同じようなアブラコをさらに2本も持っていたが嫁がいなくて総合の方は奮わなかったのが悔やまれる。

また、審査中に己の未熟さが明らかになった。私の提出した魚に砂がついたままになっていたのだ。防潮堤からの釣りで後片付けのときに魚を洗わず、そのままを提出したのだ。海水で洗うことができなくてもタオルでふき取る等、審査にはきれいな魚を出すことができたはずである。早速、吉井氏から指導を受けた。審査をする役員のことを考えれば当然の事なのにそれができなかった。恥ずかしい限りである。

宇宙人との交信

家に帰ってから早速、カジカを捌いた。すると胃からプラスチックのような大きな塊が

出てきた。真ちゅうだろうか。それにしては軽い。鉱石ではないようだ。私が今までに見た金属とはどうも違うような気がする。リールの心材に使い始めたチタンのようにも思える。青みがかった銀箔色に光り輝く金属片だ。手触りはプラスチックなのだが、どこことなく近未来的な感じがする。一カ所だけ鋭く尖っているが、他は滑らかな曲線で包まれている。硬質的な表面とは違ってその中心部はどろりとした桃色に輝く柔軟さに満ちている。前衛的な芸術品か装飾品にすら見えなくもない。

宇宙人の存在を信じ、昼夜、異星人とのコンタクトを試みている集団がいると聞く。テレビ番組等によく取り上げられて放送されているのを目にする。私は、オカルト的な心靈の類（たぐ）いは信じないが、無限に広がる宇宙からの使者なら然も有りなんと考えている。その異星人の到来を信じる集団は、深夜の星空を眺めながらUFOの影を追い求め、海岸を散策しながら宇宙から届いたと思われるような奇妙な物体を捜し回っているそうだ。

私の女房もX-ファイルは実在すると思っているらしい。この金属片は宇宙人が交信に使う物体で謎のメッセージが入っているものなのか。水銀のような内容物をγ（ガンマー）線に当てるとそのメッセージが浮き出てくるというのはどうだろう。そうとは知らないカジカがあまりの美しさに魅せられて飲み込んだものなのか。これをルアーにして魚を誘ったら地球上の魚という魚はその魅力に負けて食いついてしまうだろう。魚ばかりでなく世の女性までも虜にしてしまいそうだ。宇宙への神秘を膨らませながら寝床についた。

年が明けて初夢を見た。そのルアーを追って見たこともない魚がかかってくる。審査に提出するが誰も見向きもしない。宇宙人とのコンタクトをとる奇人変人の類いと見られ孤独感を味わい涙が溢れたところで目が覚めた。今年こそは狂人と呼ばれるような大物を仕留めて見たいものだ。

平家物語

釣遊会総会に出席した。私の年間総合成績は5位24点であった。2回欠席したが7回の中の5回トータルで審査する釣遊会で、大きくコケなかったのが、年間絵合に食い込めた原因であろう。

総合優勝の方は、岡氏が3大会連続優勝するなどみごと初栄冠を勝ち取った。嵐氏の年間絵合優勝3連覇から時が移り、釣遊会は戦国時代に入った。入れ替わり立ち代わり新しい戦国大名が名乗りを上げる。下克上の様相さながらだ。栄華を極めた者たちも後塵に追いやられ苦虫を潰すことになった。

小泉八雲の『耳なし芳一』。盲目の検校（けんぎょう）が琵琶を弾き鳴らしながら語る壇ノ浦の合戦は、聞いている平家の亡霊たちの肉体を揺さぶり、悲痛な叫びをあげさせる。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。

沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。

おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。

たけき者も遂には亡（ほろ）びぬ、偏（ひとえ）に風の前の塵に同じ。

3年連続準優勝に甘んじている嵐氏の年賀には『今年こそは頑張るぞ』との添え書さが妙に猛々（たけだけ）しく書かれてあった。

完



【つれづれ】

年間絵合成績

優勝	岡 英成	13点	(6④17①①①⑧)
準優勝	嵐 光博	15点	(2⑤13④10②②)
3 位	吉井 博	16点	(7①①⑥⑤17③)
4 位	堀内正博	23点	(4⑧14③14③⑤)
5 位	鹿島釣狂	24点	(①5050⑤⑧⑥④)

鹿島5回平均

$$1373 + 983 + 834 + 746 + 1102 = 5038$$

$$5038 \div 5 = 1008$$

年間大物賞

アブラコ	51.8cm	阿部重義
カジカ	48.0cm	岡 英成、島 強二
カレイ	35.8cm	清田章義